

## アロマターゼ阻害薬を用いた外来がん化学療法における治療継続状況

正野 隆<sup>1)</sup>、津村 直孝<sup>2)</sup>、田村 真哉<sup>3)</sup>、松野 紀世彦<sup>4)</sup>、永野 悠馬<sup>5)</sup>、前田 守<sup>5)</sup>、長谷川 佳孝<sup>5)</sup>、月岡 良太<sup>5)</sup>、森澤 あずさ<sup>5)</sup>、大石 美也<sup>5)</sup>

- 1)(株)アイン信州 若里土屋薬局
- 2)(株)アイン信州 茅野土屋薬局
- 3)(株)アイン信州 飯山土屋薬局
- 4)(株)アイン信州
- 5)(株)アインホールディングス

【目的】乳がん治療等で長期服用されるホルモン療法薬については、継続的な服薬管理を行うことが重要である。そこで、ホルモン療法薬の代表例としてアロマターゼ阻害薬(以下、AIとする)に着目し、これを用いた外来がん化学療法の継続状況を調査し、薬局薬剤師の今後の課題について考察した。

【方法】2017年4月から2020年10月に当社グループが運営する保険薬局598店舗が応需した処方箋47,309,052枚を対象に、女性患者の抗がん剤、及びホルモン療法剤の処方状況を調査した。また、AIの例としてアナストロゾール、レトロゾール、エキセメスタンの服用継続日数をカプランマイヤー法で解析を行った(医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0095)。

【結果】女性患者における抗がん剤を含む処方箋割合(以下、抗がん剤応需率とする)及び抗がん剤を含む処方箋におけるホルモン療法薬を含む処方箋割合(以下、ホルモン療法薬応需率)は2017年4月ではそれぞれ1.13%、62.0%、2020年10月ではそれぞれ1.33%、61.8%であった。また、服用期間中央値及び95%CIは、アナストロゾール(n=4,476):1,000日[956-1,040]、レトロゾール(n=3,330):896日[861-946]、エキセメスタン(n=888):553日[489-643]であった。

【考察】調査期間において抗がん剤応需率は増加傾向であり、ホルモン療法薬応需率は終始約60%と高く、薬局薬剤師はホルモン療法薬への対面頻度が高いことが示された。また、今回調査したAIの服用期間中央値は、約1.5年~2.7年と薬剤による差が大きかった。したがって、薬局薬剤師はAI服用患者の長期治療を前提として服薬アドヒアランスと患者QOLの維持、向上に努めるとともに、AIの中では比較的短期での脱落が懸念されるエキセメスタン等を服用している患者については、離脱の原因となりうる副作用の早期発見等を心掛け、支持療法の提案等により積極的に介入することが重要であると考えられる。

(第31回医療薬学会年会(2021年10月, Web)にて発表, 一部要約)